大学生部門

岡山県知事賞

私の居場所

山陽学園大学３年　王（おう）　暁新（ぎょうしん）

私には妻、母、留学生という3つの顔がある。日本で暮らす中国人留学生が結婚し、出産した場合、子どもは中国で暮らす夫の両親に育ててもらっているケースが多い。

私は、結婚して家庭を持ったら、子どもは絶対に自分で育てたいと思っていたので、夫の両親から、娘を中国で預かりたいという申し出があった時も、夫と相談してきっぱり断った。私が絶対に娘を手放したくないと思っている理由は、私自身の幼少期にある。

中国では、特に珍しいことではないが、両親が共働きだったので、私は幼い頃、父方の祖母に面倒をみてもらっていた。祖母は、家でゆっくりしているのを見たことがないほどの働き者で、誰に対しても思いやりのある優しい人だった。当時、祖母の家には、祖父と、叔父夫婦とその子どもが暮らしていた。叔父夫婦も共働きだったので、祖母はその子どもたちの世話もしていた。日々の苦労が重なったからだろうか、祖母は私が小学４年生の時に病気で亡くなった。死ぬ直前まで、孫たちのことを心配していたと聞いている。

祖母は、自分の人生をどう思っていたのだろうか。自分のことより、祖父や叔父夫婦や、孫たちのことをいつも優先していた祖母は、幸せだったのだろうか。私には分からない。

祖母が亡くなったことで、私は両親と弟と暮らすようになった。母は、私と弟の世話をするために仕事をやめ、自営業の父の仕事を手伝うようになった。しかし、私が中学生になった頃から、父の仕事はますます忙しくなり、家族が揃って家で過ごす時間は、ほとんどなくなった。私が中学生の頃に住んでいた家の記憶は、いつも私と弟の2人だけだ。

子どもに少しでも良い生活をさせるために、親が必死で働いていることは間違いない。しかし、それはお金と引き替えに、子どもと過ごす大切な時間を犠牲にしているのだ。私は、父や母と一緒に過ごす時間がもっと欲しかった。この時間は、決して取り戻せない時間だ。

幸いなことに私の夫は、子どもは夫婦で育てるべきだという、同じ価値観を持っていた。また、夫は妻が留学生として日本の大学で学ぶことにも賛成してくれた。子育ては何よりも優先されるべきだが、親も子どもと共に成長できたら良いと考えているのだ。夫のこうした考え方は、高校生の時から日本に留学し、日本の大学を卒業し、大学院も修了して、日本の企業で働いていることが少なからず影響しているだろう。

かつて、私は父に「おまえが男の子だったら、弟はいなかったよ」と言われたことがある。父は、どうしても男の子が欲しかったのだ。大学で古典文学の講義を受けた時、『源氏物語』を書いた紫式部が、父親から「おまえが男の子だったら」と言われたという話を聞いた。私は紫式部と同じだと思った。女の子に生まれたことは、自分の責任ではないのに、弟と差を付けられているようで悲しく、納得できなかった。

同じ中国人の男性でも、父と夫は全く異なった価値観を持っている。世代による差もあるだろうが、中国社会でしか暮らしたことのない父と、日本社会で暮らしている夫との大きな違いは、多様性を受容していく社会を経験しているかどうかではないだろうか。日本は中国に比べて「男女共同参画社会」という考えが浸透しているように思う。このような価値観は、私の父母には理解できないかも知れない。異なる価値観を認めることは、容易なことではないだろう。亡くなった祖母が幸せだったかどうか、私が知るよしもないのと同じくらい、幼い頃の私の気持ちを父母に理解してもらうことは難しかったかも知れない。

中国の女性は、結婚しても夫の姓を名乗らず、いわゆる旧姓のままだ。しかし、実家の親からは、結婚した娘は「婿の家の人間」という扱いを受ける。中国の女性は自分の居場所がないようで、私は寂しく感じていた。しかし、夫と結婚し、家庭を持ったことで、私は「独立した夫婦の家庭を築けば良い」という新しい価値観を手に入れ、確かな自分の居場所を見つけることができた。

高校生部門

岡山県知事賞

感謝のぶどう

岡山白陵高等学校１年　中宗 華

私は都会に生まれ、都会に育った。小さい頃から野菜があまり好きではなく、晩ごはんが八宝菜だった日は泣いて「食べない」と駄々をこね、代わりにケチャップをかけたごはんかお菓子を食べた。共働きだった両親に代わって私の面倒を見ていたのは祖父母で、おねだりをするとゲームでも洋服でも美味しいものでもなんでも買ってくれた。過ごしている部屋にはつねにクーラーがかかっていたし、ぜいたくな暮らしをしていた。

そのころ母は自営業を営んでおり、父は会社に勤めていた。特に父は夜の帰りが遅いうえに朝が早く、まだ幼くて早くに眠ってしまう私は平日父とまともに顔を合わせるときなどほとんどなかった。ストレスのせいか、食生活も不健康だった。

そんなある日、両親が「田舎に行きたい」と言い出した。仕方なく、親の田舎めぐりに付き合ったが、「何もない田舎なんて親もすぐに嫌になるだろう」と思った。しかし思ってもみないことに数ヵ月後、近いうちに移住することを告げられた。将来住むことになると連れて行かれた家は古民家で、とても住める環境ではなかった。休日になると、古民家の修理を少しずつしていき、なんとか生活できるような状態になったとき、信じられないことに、両親は仕事を辞めた。農業従事者になることを決意したのだ。

両親はブドウ農家になることを最終目標として、計画を立て始めた。まず、ブドウを植える畑を整えることになり、私も手伝うことになった。昔からクーラーのきいた部屋でだらだらしてばかりいた私には農作業は本当にきつかった。これから先、私の親はこんなきつい仕事毎日やっていけるだろうか、と子供ながらに不安に思った。

ブドウが実際にできるのは、苗木を植えてから3年から5年かかるため、両親はブドウに加えて無農薬で野菜をつくることにした。家のあたりではイノシシやサルやシカが出没するため、電柵を用意し、畑の周りを囲んだ。

しかしそんなに簡単な話ではなかった。サルやシカは簡単に電柵を飛び越えることができるのだ。特にサルはずる賢くて、人間が畑にいないタイミングを見計らって群れで押し寄せ、あるものをなんでも食い散らかすのだ。しかも食べ方もいやらしく、取った野菜1つを食べるのではなくいろいろな野菜を数口ずつ食べるのだ。それだけでなくサルは人間の性別を見分けることができるらしく、女性をなめているらしい。とにかくサルは農家にとって1番の厄介者なのだ。

サルの初襲撃の日、母はとてもがっかりして1日中落ち込んだ。汗水たらして苦労して育てた野菜を食べられ、畑を荒らされたのだから無理はないと思う。それから何度かサルの不意打ちを体験したある日、ちょうど家にいるときにサルがやってきたのが見えた。すると母は「来た！」と言ったかと思うとすぐさま家を飛び出し、畑に走り、体をはってサルを追い払おうとした。母のあまりの迫力のためか、普通は女性をなめるサルも驚いて逃げ去った。母が男に間違えられたのでは？と父が言うとさすがにおかしくて笑ってしまった。それからしばらく母がサルを追い払う係になったのは言うまでもない。

うちで初めてできた無農薬の野菜はナスとキュウリだった。父は早速とれたての野菜を料理して晩ごはんにした。私はナスが大嫌いだったが1口食べてみると甘くて美味しくて、これがナスだなんて信じられなかった。キュウリも今まで食べていたものとは全然風味が違ってとても美味しかった。それから私は急速に野菜好きになり、今では八宝菜が食べたくて仕方がないと思うようになった。

田舎に移住する前、田舎は何もないし、つまらないところだと思っていた。しかし実際来てみると、確かに不便だな、と思うことは多かったが、空気はおいしいし、自然は豊かだし、良いところがとても多いことが身に染みて分かった。もし両親が移住を決意しなかったら、私は今でも視野の狭いわがままでしかない都会っ子のままだったかもしれない。こんな経験をすることができて、とても幸せだと思っている。立派なブドウ農家になるにはまだまだ時間がかかるとは思うけれども、甘いブドウをお腹いっぱい食べる日が来るのを楽しみにしている。

大学生部門

岡山経済同友会代表幹事賞

家庭の多様性と働き方の多様性

岡山県立大学４年　荻野　葉月

近年、女性の社会進出に伴い、様々な働き方が出てきている。一昔前は、男は仕事、女は家庭といった偏った考えであったが、時代の変化とともにその考えも薄れてきている。正規雇用、非正規雇用、パートタイム、アルバイトなど、私たちは男女問わず色々な働き方を選択できる時代である。この論文では、働き方の多様性を、自身のエピソードを交えながら家庭の視点から考えていく。

私の両親は私が小学生の時に離婚したので、私は母子家庭で育った。母は、少ない給料で女手一つで私たち三人の子どもを育ててくれた。今となっては、アルバイトなどを通してお金を稼ぐ大変さを知っているが、小学生の頃は、旅行や外食などに滅多に連れて行ってくれないことに不満をいだいたり、友達と比べて劣等感を感じたりしていた。「どっか連れていってよ。」と私が言うと、「うちは母子家庭だから、他のおうちとは違うの。」と言われた。そうなるといつも、「なんで離婚なんてしたん、お母さんとお父さんが勝手に離婚しただけで、私たち子どもには全く関係ないことじゃが。」と思っていた。

しかし、小学生のころ、一回だけ母がディズニーランドに連れて行ってくれたことがある。初めてのディズニーランドで、久しぶりの家族での旅行で、とても嬉しかったし、とても楽しかった。いつもは節約を念頭に置いて生活している母だったが、その時ばかりは好きなものを買ってくれ、好きなものを食べさせてくれた。私が高校生になったころに聞いたのだが、母は何年もコツコツと貯金をし、私たち子ども３人をディズニーランドに連れて行ってくれたらしい。

毎日文句も言わず働き、私たちのご飯を作り、洗濯をし、ピアノや習字、バレーボールなどの習い事をさせてくれ、さらに内職までしている時期があった。その頃は、周りの友達と比べて、「あの子のおうちより・・・」とばかり考えていたが、今となっては、母は一生懸命私たちを育ててくれ、出来ることはできる範囲で行ってくれていたことがわかった。責めるばかりしてしまって、申し訳ない気持ちと、立派に母親として育ててくれた感謝の気持ちとが入り混じっている。今となっては、なかなか「ありがとう」と素直にいうことは恥ずかしいが、この場を借りて「ありがとう」と伝えたい。

今は、離婚した父親と一緒に会社を立ち上げ、実家の一部を事務所にしている。そして、母親は事務の仕事を行っている。周囲から見れば、普通ではないし、複雑な関係だと思う。しかし、離婚していようがしていまいが、仕事をする上では関係なく、お互い一人の人間として接しているのを見て、このような働き方もありだと私は思う。

世の中のすべての家庭にそれぞれの事情があり、様々な家族の形がある。私は、自分の家族の形を普通だとは思わないし、一般的な家庭とは少し違うと思うが、それを恥ずかしいと思ったり、嫌だと思ったりしたことはない。多種多様な家庭があるから、働き方にも多様性が生まれ、様々な選択肢が生まれるのだと思う。私ももうすぐ大学を卒業し、社会人として世に出ていく。アルバイトとはまた違う責任感や大変さがあるだろうが、お金を稼ぐことの大変さ、働けることのありがたさを感じながら頑張っていきたいと思う。そして、育ててくれた母に感謝の気持ちを忘れずに、親孝行していきたいと思う。もちろん、金銭面で様々な支援をしてくれた父親にも、感謝の気持ちを忘れないようにしたい。

以上を踏まえ、すべての家庭が幸せな生活を送るには、固定的な概念ではなく、働き方にも多様性が必要なのであると考える。

高校生部門

岡山経済同友会代表幹事賞

母のお弁当

岡山白陵高等学校２年　桝谷 奈央

私の父は開業医です。母は父の病院でそのお手伝いをしています。仕事が終わって自宅に戻ってくるのはいつも夜の10時頃。私と弟は、学校から帰ってくると母が作っておいてくれた晩ご飯を食べ、塾に行ったり自宅で勉強したりして過ごしています。普段、家族全員で食卓を囲むということは多くありません。私が幼少の頃からこの生活スタイルなので、私にとってこれが当たり前になっています。

高校2年生になった今ではないですが、中学生の頃までは、このような生活スタイルの話を人にすると「寂しいわね」と言われることがありました。「そんなことないです」と否定するとかえって「強がってるんじゃないの？」と返されることが多かったので、いつしか「そうですね」と適当にうなずき返すことが多くなっていきました。ですが「寂しくない」という気持ちに嘘はないのです。たとえ一緒に食卓を囲むことはできなくても、私が寂しさを感じずにいられた秘密は、母が作ってくれる「お弁当」にあります。

私の通っていた幼稚園と小学校は給食がなかったため、私が幼稚園の頃から現在まで実に12年間もの間、母は私のためにお弁当を作ってくれています。母の作るお弁当には、冷凍食品や出来合のお惣菜といったものが一切入っていません。全て、母の手作りです。

また夏には、おそうめんやうどん、冬には温かい豚汁やクリームシチューなど、季節に合わせたちょっと変化球的なメニューを入れてくれることもあります。一緒に昼食を食べる友達に「いいなぁ、おいしそうなお弁当だね」と褒められると、「ありがとう。すごくおいしい。最高！」と自慢げに答えています。家に帰って母に「友達に褒められたよ」と報告すると、母も「まぁお弁当生活が長いからね。楽しいしね。」と何でもないような感じですが、次の日のお弁当が前日より気合の入ったものだったりして、おかしくって1人ニヤニヤしてしまうことがよくあります。母のお弁当を食べている時、私は心の中で「あ、このおかず私が前に好きって言ったやつ」「やった、豚の生姜焼き入ってる」「今日の卵焼きちょっと焦げてるな」などと考えながら食べています。お弁当の向こうに、それを作ってくれた母の姿を思い浮かべながら食べているせいか、母とコミュニケーションしている気分になるのです。ですから、確かに普段一緒に食卓を「囲む」ことは少なくても、実はお弁当を通じて私は母と一緒に食事をしている、ということになります。これが、寂しさを感じなかった理由なのです。

母が私や弟のお弁当のために、毎日仕事が終わってから夜遅くまで開いているスーパーに行って材料を買っていること。朝早く起きて1品1品丁寧に作ってくれていること。これが母にとってどれほど大変で、私たちにとってどれほど幸福なことなのか。最近、新聞やテレビなどで「子供と貧困と食事」に関する報道を目にすることが増えました。中には給食以外の食事を全く取れない子もいるそうです。共働き家庭や、1人親家庭の増加によって、食事にかけられる時間や手間が減少していることが一因です。

働くという行為はその人の生き方だけでなく、もっと範囲を狭めればこうした食のあり方にまで影響を与えます。日本は現在、少子高齢化によって主要な労働人口が減少し、人手不足になっています。こうした状況の中で働くことを推進する政策が取られるのも理解できます。しかし、その結果、食事を満足に取ることができない、寂しさを我慢しながら1人食事をする子供が増えているならば、そうした副次的な問題まで含めて考えていく必要があるのではないでしょうか。

お母さん、毎日仕事で忙しい中、私たちのためにお弁当を作ってくれてありがとう。直接顔を合わせる時間は少なくても、私は確かにあなたの優しさを受け取っています。

大学生部門

岡山大学長賞

家事は誰の仕事？

山陽学園大学４年　青木 康朗

我が家は、父が働き、母が家事など家のことをするという、世間でよく言われる「一般的」な家庭でした。私が小学校高学年になった頃、母は近くのスーパーでパートとして働き始めましたが、母が家事をするという点では特に変化がありませんでした。このことについて、私は何ら違和感を覚えることなく過ごしていました。そのため、大学生になっても自分から進んで家事をしようとは思いませんでした。なぜなら、母親がいるのだから、家事をやってもらうことが当たり前であり、また、家事は母親の仕事だと考えていたからです。私はこの考えに疑問を持ったことがありませんでした。

しかし、去年の夏、事態が急変しました。私の母方の祖父が怪我で入院することになったのです。当初は祖父が入院する１か月の間、母が祖母の面倒を見るために実家に帰るという話でしたが、祖父の病状がどんどん悪化していき、入院する期間が2か月、3か月と長引き、最終的には母が実家に残らなければ祖父母の生活がままならなくなりました。つまり、私の家から、今まで家事をしてくれた母が急にいなくなったのです。

当然のことながら、私の生活も激変しました。大学に行く時は、いつも母にお弁当を用意してもらっていましたが、それが無くなり、パンやおにぎりを買ってから大学に行くようになりました。今までは用意されて当たり前であり、特にありがたいとも思っていなかったお弁当がどれだけありがたいものだったかを、初めて痛感しました。夕食も外食をすることや、簡単なもので済ますことが増え、いつも食事を用意してくれていた母の存在がいかにありがたいものだったのか、食事の用意がどれだけ大変だったのかを知りました。

また、大変なのは食事の用意だけではありませんでした。母が不在となった我が家では、父と私で家事を分担しなければならなくなったのです。父は「自分がやるからいいよ」と言ってくれるものの、父にも仕事があるため、その言葉に甘えるわけにはいきません。私は20歳を超えてから突然、家事など自分の身の回りのことをしなければならなくなったのです。

実際、家事をしてみると驚くことや面倒なことが沢山ありました。例えば、洗濯物です。衣類は洗濯しなければすぐに溜まってしまいます。洗濯した後は、干さなければなりません。乾いたら、今度はそれを取り込んで畳み、元ある場所に戻していく必要があります。そうしなければ明日着るものを確保できません。

食器もただ水につけておけばいいわけではなく、洗剤できれいに洗い、水で濯ぎ、乾かしたら、それをきちんと食器棚に戻さなければ、洗い場に食器が溜まって、置き場がなくなってしまいます。食器を戻す場所も、きちんと元ある場所に戻さないと、どこに何があるか分からなくなってしまいます。部屋の掃除や片付けも、時間を見つけては自分でしなければなりません。

今まで母がしてくれた家事のすべては「当たり前のこと」ではなく、「特別なこと」であり、これを自分の代わりにしてくれることは、とても幸せなことであるということを改めて実感しました。何度か「母がいてくれたら」と考えることもありましたが、本来、家事など身のまわりのことは、自分でしなければならないことであり、言わば自分の仕事です。家事は、男性、女性に関わらず、快適な日常生活を維持するために、自分でしなければならないことだったのです。

男女共同参画社会基本法の第6条には、男女相互の協力と社会支援の下、家族の一員として役割を果たすことが規定されています。私は、大学に入学して間もない頃、建学の精神を学ぶ授業で、「男女は両輪、両翼の如し」という言葉に出会いました。これこそ、現代の男女共同参画社会を見据えた視点ではないでしょうか。

将来、私も家庭を持つことになると思います。その時は「男性だから」「女性だから」という固定観念に捕らわれることなく、家事は一人の人間として自立した生活を営むために当然すべきことと捉え、パートナーと話し合い、互いを尊重しながら、「男女は両輪、両翼の如し」の精神を実践していきたいと思っています。

高校生部門

岡山大学長賞

働く

岡山白陵高等学校１年　天満 瞳

和顔愛語。優しい笑顔と、思いやりのある言葉使いで、自分と周囲の人々をしあわせにする。それが、両親の経営している病院のスローガンだ。

私の将来の夢は、父のような医師になることだ。そして、母のように働きながらも、家族をしっかり支えられるお母さんになること。小さなときから、出張や、当直で父は夜家にいないことはよくあった。朝起きると夜遅い父はまだ寝ていて、医師という命を預かる仕事の重みと、病院を経営し、何百人もの職員を雇うという大変さを感じていた。仕事の話をよくしてくれるようになったのは最近で、それまでは父がどんな仕事をしているのかもあまりよくわからなかった。だから、昔は、医師にはなりたいが、私にそんな大役が出来るのかなと考えるときもあった。でも、父と仕事の話をすることは、少なかったけれど、母と父の仕事の話はよくしたし、私はその話を聞くのも好きだった。大変そうだったけど、いつもカッコいいなと思っていた。

母は、主に父の病院の経営を支えている。だから、病院が大変なときは、帰ってくるのが遅くて、祖母がいつも文句を言っている。でも、母は、職員に早く帰ってもらうために、今日は遅かったんだといっていた。そのときに私は、イクボス宣言を思い出した。数日前、私の通っている高校に、現在、厚生労働省で働いている卒業生が、進路について講義に来てくれた。イクボス宣言とは、そのときに聞いたことだ。「イクボス」とは、職場で共に働く部下、スタッフのワークライフバランスを考え、その人の人生の応援をする上司のことだ。母は、イクボスなのかな？と思った。これから私が働く上で、いつかはきっとみんながついてきてくれるような上司や経営者、になりたいけど、それまでに働くとき、残業や、勤務時間以外の労働がたくさんあると、大変だ。だから、イクボスはとてもすごいひとだと思った。

両親は、標準よりかは、勤務時間が長くて、大変なことが多い。家にいる時間も少ないけれど、私は、２人のことを、心のそこから尊敬している。どんなに大変でも、母はいつも私たちのために、ご飯を作ってくれて、学校であった話を聞いてくれたり、悩み事を聞いてくれたりする。父は大切な休みの日をいつも家族のために使ってくれる。進路の相談を聞いてくれたり、時には旅行に連れて行ってくれたり、私たち家族が喜ぶことをたくさんしてくれている。進路の話でもめたり、その他もたくさん迷惑をかけたり、今思えばただでさえ忙しい父や母が当たり前だと思ってしてくれることは本当はもっと感謝しないといけないことで、決して当たり前なんかじゃないと思った。実際こんなことを考え始めたのは、私が県外の高校に行き、両親とはなれたところで暮らし始めたからだ。離れている分、喧嘩や言い合いも減ったと思う。でも、いつも電話や手紙で励ましてくれたり、離れていても迷惑をかけることはあって、改めて親の大切さを感じることが出来た。

普段は、改めて両親について深く考えることはなかったので、今回この作文で改めて尊敬し、深く感謝をすることができた。今、私が恩返しができること、それはきっと、勉強をすることだと思う。高校も私にあった環境を数ある高校から選んでくれて、遠いところへ出してくれて、いつも期待をしてくれている。勉強して、父の病院を継ぐこと、それが私が今出来る恩返しだ。だから、今苦しいことから逃げないで、ちゃんと勉強していつかきっと恩返しをしたいと思った。

両親へ
改めて御礼を言うのは、不思議な感じがするけれど、いつも家族のために働いてくれて、支えてくれてありがとう。私もきっと、そんな人になれるようにするね。

瞳

入　賞

大学生部門

岡山県立大学 4 年
河田　里咲

岡山県立大学 3 年
渡邉　光季

山陽学園大学 4 年
小室　日陽理

ダイバーシティ教育推進学校賞

岡山学芸館清秀高等部

岡山市立岡山後楽館高等学校

岡山白陵高等学校

興譲館高等学校

（50 音順 ）